



文字瓦を上から見た写真。側縁（右）が剣先形になっている。
川原寺所用瓦窯である荒坂瓦窯の特徴。



目下部工□□



飛鳥寺北方出土文字瓦（原寸大）

狭くて細長い調査区から飛鳥寺の瓦が大量に 飛鳥寺北方の調査（飛鳥藤原第 188-19 次、192-1・2 次）

2017年3月から11月にかけて、飛鳥寺講堂の約40m北で発掘調査を実施しました。調査は県道上のガス管の移設や電線共同溝設置にともなうもので、幅0.5～2m、全長240mにもおよぶ狭くて長い調査区でしたが、そこからコンテナ417箱もの大量の瓦が出土しました。瓦の時期は、古代のものを中心に近現代まで幅広く、種類も軒瓦、丸・平瓦をはじめ、鷗尾、磚（古代のレンガ）、文字瓦などさまざまです。

本調査区から出土した瓦は、軒丸瓦は6世紀末から7世紀初頭までの飛鳥寺創建瓦と7世紀後半の瓦が大半を占め、1956・1957年の飛鳥寺中心伽藍の発掘調査で出土した瓦の様相とも合致します。ただし、川原寺と同じ軒丸瓦や軒平瓦、丸・平瓦が一定量出土したことは注目できます。飛鳥寺には川原寺の瓦窯からも瓦が運び込まれていました。写真の文字瓦は原寸大で、側縁が剣先形を呈し、表面の叩き目や布目をすり消した丁寧なつくりです。これらは川原寺創建瓦を生産した奈良県五條市荒坂瓦窯の特徴であり、7世紀後半に位置付けることができます。書かれた文字は人名とみられ、瓦生産に関わった工人の氏族名の可能性も考えられます。

これらの瓦は飛鳥寺のどの建物に使われたものなのでしょうか。調査区に近接する講堂がその候補のひとつになりますが、講堂にどのような瓦が用いられていたのか現状ではまだわかりません。今後、丸・平瓦を含めた総合的な瓦の調査を進めながら、周辺の調査成果にまちたいと思います。
（都城発掘調査部 石田 由紀子）